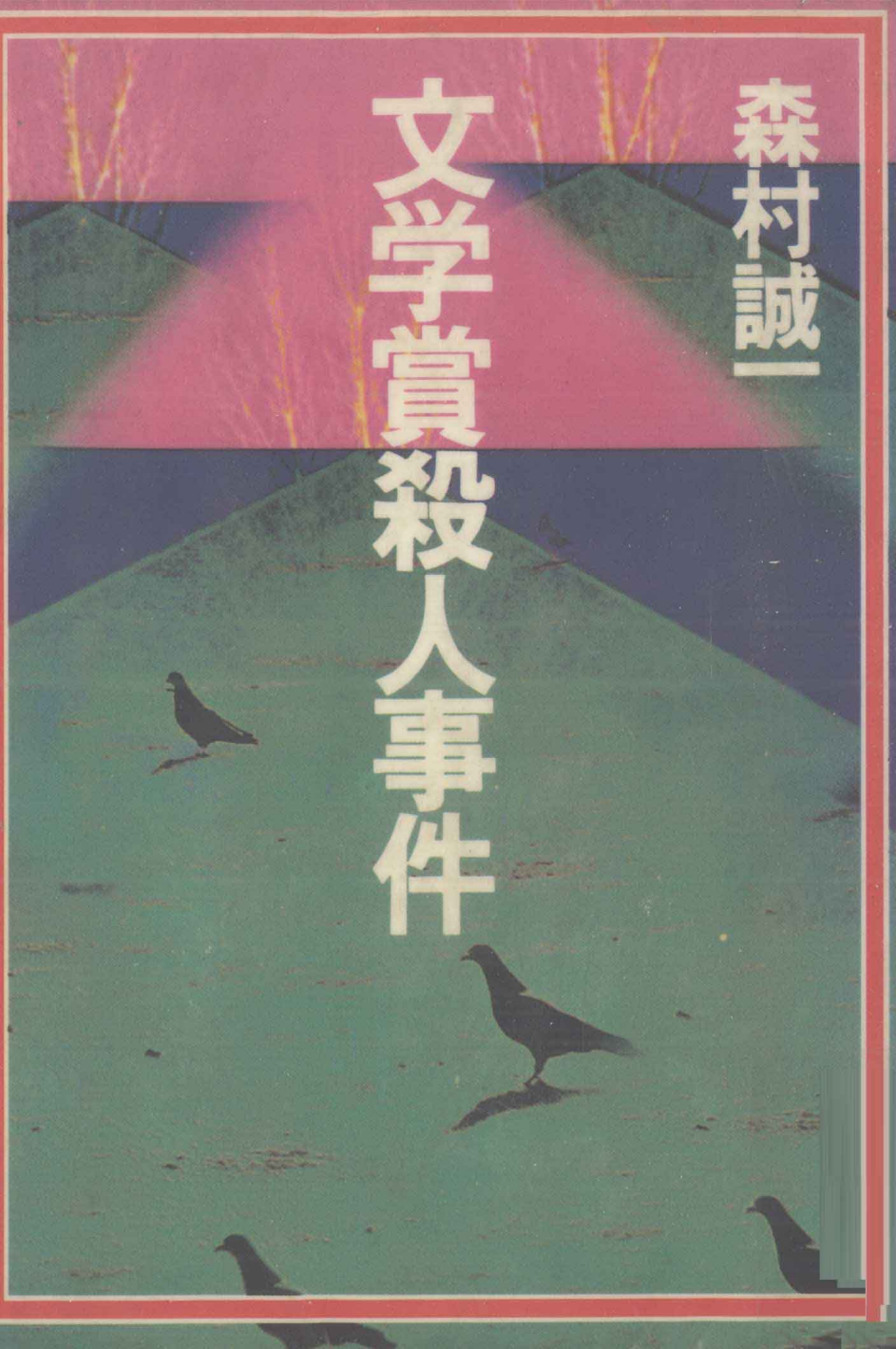


森村誠一

文學賞殺人事件



森村誠一 文学賞殺人事件

文学賞殺人事件

森^{もり}
村^{むら}
誠^{せい}
一^{いち}

発行者 小野 田 政
編集者 塩 田 廣 八
印刷 株式会社堀内印刷所
製本 田中製本印刷株式会社
発行所 株式会社サンケイ出版

東京・千代田区神田錦町三の

一五梅屋ビル(旭)

大阪・北区梅田町二七(30)
乱丁・落丁本はおとりかえします

©森村誠一 1971 Printed in Japan
〈検印省略〉

0093-076642-2756

目次

文学賞殺人事件	3
奔放の宴	39
サギ・カンパニー	115
暗渠の狼群	175
垂直の憎悪	227
静かなる発狂	263

文学賞殺人事件



插画・安岡
旦

「あの男はどうしても殺さなければならぬ」小高省吾は思った。

自分が世の中に出るためには、いやすでに出ていたが、このエリートとしての地位を確固不動のものにするためには、是非とも彼に消えてもらわなければならなかった。

今を時めく流行作家としての地位も、彼があつたことを黙っていてくれるからである。いわば今日の地位も富も、そしてまだまだ発展する将来も、すべて彼の胸三寸にかかっている。その意味では、自分がどんなに売れっ子になっても、彼に操られている人形でしかなかった。

自分の現在の地位はそれほどのものか？ 人間一人を排除しても、なおかつ維持しなければならぬほどの、ご大層なものであろうか。

小高は、その問に対して自信をもってイエスと答えられる。

彼は、小説家以外の何ものにもなるつもりはなく、それに向かってひたすら努めてきた。

長い苦勞のかいあって、ようやくそれになれた今も、それ以外に自分の職業はないと信じている。世の中に作家ほど、自己顕示欲を満足させられる職業が他にあらうか。自分が心に蓄え、かつ筆に託して表現したものが、活字に定着されて、署名つきで顕彰される。

たとえそれが不朽の名作ではなくとも手もとに保存するかぎり、自分の作品として、自分の「生きていた証拠」として永く留められるのだ。

世の中に「署名つきの仕事」なんて、そうめったにあるものではない。社長にしても、サラリーマンにしても、板前にしても、自分が為した仕事に署名を入れられることはない。精々、大社長が、死んだ後になってから胸像にされるくらいである。

映画スターやテレビタレントなどは、花やかさにおいては、作家を上まわるだろう。だが彼らの作品は、多くのチームワークの所産であり、作家のように単独名で顕彰されることもなければ、活字として作品が長く残ることもない。

映像が消えれば、はいそれまで、文字どおりの「虚像」として速やかに忘れ去られてしまう。

生活のサイクルの速い現代では、作家もテレビタレント並みで、週刊誌や月刊誌への作品発表が間遠になれば、忘れられる速度に大差ないと考えられなくてもいいが、やはり活字を発表の媒体にする作家には、テレビタレントなどとはおのずから異なる寿命と、その燃焼があった。

自分の作品が一冊の本になって、その見本刷りが出版社から届けられた時の感動と喜び、同時に何本も発表した短編小説が、大手商業誌の巻頭や巻末に飾られて、全国紙の広告面にでかかると、自分の名前と作品名が紹介されたときの陶醉、それは単なる自己陶醉ではなく、世の中に打ち克った勝利感のようなものであった。

その感動は作家として文名とみに上がり、出版社からチャホヤされることに馴れても、少しも薄れることはない。この種の勝利感をコンスタントにもちつづけられる商売は、作家以外にないのではないか。

小高は、当分の間、書き下し長編はいいさいやらないことにしていた。労力がかかる割に、収入や広告量などが短編とは比較にならないほど少ないのだ。大手商業誌に発表すれば、わずか五、六十枚の短編でもでかかどと広告される。名前は売れるし、稿料もいい。それら短編をいくつか集めて本にすれば、印税で二重に稼げる。長編は連載をまとめればよい。書き下ろしでなければ、いいものは書けないというのは、売れない作家のジェラシーにすぎない。

最小のコストで最大の効果を狙う経済学の原則を、小高は最もガメツク採り入れて、流行作家と

しての地歩を着々とかためていた。

小高は現在の地位の晴れがましさを思うにつけても、過去の暗く長かった同人誌時代を思い出すのだ。胸にうつばつたる表現の野心をかかえながらも、発表の舞台をもたない、ほとんどすべての文学青年がそうであるように、小高もその欲求不満を同人誌に託した。同人誌といっても、同人が十人足らずの、中央から遠く離れた地方町の片すみでタイプ印刷で細々と出したものである。

しかしそんな同人誌に作品を発表したところで、少しも欲求不満の解決にはならなかった。有力批評家や編集者の目にとまるチャンスなどあろうはずがなく、同人仲間だけで読み、批評する「精神のマスターベーション」にすぎない。

小高は、地方町の片すみの同人誌に自分の才能を埋めなければならないのかと思うと、前途がまっ暗になった。

もちろん、中央の有力誌の主催する新人賞や、新聞の懸賞小説に応募したことはあった。しかし、その門の狭さは宝クジと同じだった。

もともと文学というものが主観性が強いうえに、あらゆる世界の中で最も新人に酷いところである。いわゆるヨコ型の社会で、構成メンバー全員（大多数）の同意が得られなければ、その住民として「登録」されない。しかしいったん登録されると、昨日や今日の新人でも、よい仕事さえすれば、たちまち古参先輩を追い抜くことができる。

その意味で古参先輩にとっては、新人はみな商売敵ライバルなのだ。商売敵を、同一の「利益共同体」に「入会」させることを歓迎できるはずがない。

宝クジ並みの当選率をくぐり抜けた新人に対しても、選者全員ベタボメというようなことはめったにない。みんな渋々「入会」を認めているのである。



従来、作家になる主たる方法として、

一、特定の作家の弟子になる。

二、出版社に直接売りこみをかける。

三、新人文文学賞経由。

の三つが考えられていたが、一と二の方法がほとんど廃れてしまった現在、三だけが作家への登竜門ということになる。ところがこれが「天文学的」な確率であり、どんなに優れた作品でも選者（大部分は下えらびや予選）の好みではねられてしまえばおしまいである。

全国に文学青年と名のつく人間は、二百万とも三百万ともいわれるのに対して、本当の意味での流行作家が二十人しかないということをみて、いかにその確率が天文学的であるかわかるというものである。

となると、文学青年にとって、本人自身は「腕」にかなりの覚えはあっても、作家になる道はほとんど断たれていることになる。

自^{マスター・ペーショ}慰ではあっても、それをしないよりはよい。中央誌に発表される職業作家の作品を徹底的に貶^{けな}しつけることによって、自分をよけいみじめな気持ちに追いこみながらも、精神のマスター・ペーションとして、せっせと同人誌に書く以外にないのである。

「おれの作品のほうはずっと優^{すぐ}れている」

という自負はあっても、自分がこのように晴れがましい舞台で発表する機会はいくらあるまいという諦めに圧倒されて、コンプレックスのかたまりのようになってしまうのだ。

松江俊吉は、その同人誌、「潮流」の同人仲間だった。小高は、たいていの既成作家や同人仲間には負けなと自負している。「天狗」だったが、松江の才能だけに一目おいていた。

まず彼は天性の作家の「目」をもっていた。同じテーマを書いても、視角が常に新鮮で、斬りかたが鋭い。文章の歯切れがよく、パンチがきいている。

また稀に見る構成力をもっていた。いまはこんな同人誌でくすぶっていても、機会さえあれば必ず中央文壇に花々しく登場する人材だと、小高は見ていた。

少なくとも自分よりは先に脚光を浴びるだろうということを、小高は残念ながら認めないわけにはいかなかった。

ところが松江俊吉はふしぎな男で、自分の才能に気がつかないのか、小説は趣味で書いているのであって、プロの作家になるつもりは少しもないといった。テレ臭さからではなく、本気でそう思っているようだった。

「自分の書いたものが、印刷されて、大勢の目に晒されるかと思うと、身がすぐむ思いだよ、そんな恥ずかしいおもいにはとうてい耐えられない」

といって、彼は本当に身をすくめるようにするのである。

「印刷されるのは、同人誌でも同じだろう」

と小高が問うと、

「同人誌は身内だよ、他人に読まれることはないからね」

「しかし、書くということは、本来、他人に読んでもらいたいからじゃないのか。もしそうでなければ、日記を書いていけばよい」

「ひとには読まれたくないけど、自分の書いたものを活字にして残しておきたいんだよ。たとえば、

タイプ印刷でもね」

と松江は度の強いメガネを鼻の上にずり上げて、弱々しく笑うのだった。

松江は、その町の地方銀行支店に勤めていた。サラリーマンとしての能力は大したことはないらしくて、土地の高校を卒業すると同時に入学してすでに七、八年勤めているが、いまだに「窓口」である。文学青年の大部分は、職場や家庭生活の欲求不満を小説に託するもののだが、松江はしごくこの職場に満足しているらしくて、小説はあくまでも趣味だといった。

家が地元の大地主で別に働かなくとも生活に困らないせいもあったかもしれない。松江はこの一人息子で、年老いた両親は、早く孫の顔が見たいと、次々に縁談をもちかける。だが、当人に向にその気がないらしくて、十年一日のように銀行へ出勤し、月に一、二回ある同人仲間の集まりに顔を出して、「文学」を語るのを楽しみにしていた。それと魚釣りだけが道楽で、女遊び一つするでもない、きわめて地味な性格だったのである。

その松江が、千枚近い長編小説を書いて、原稿をひそかに小高に見せた。同人仲間からも孤立していた松江だったが、どうしたわけか、小高だけには親しみを示し、作品を同人誌に発表する前に必ず彼に見せた。

「今度こんなものを書いてみたんだが、あんまり長すぎて同人誌に発表するのは無理なので、どうしようかと思ってるんだ。もしひまがあったら、ちょっと目を通してくれないか」

おずおずと差し出した原稿を、家へもち帰って読み出した小高はそのまま夜を徹して読み上げてしまった。

読み進むうちに猛烈な興奮が突き上げてきた小高は、読み終ると、松江に対して殺意に近い嫉妬を覚えた。そこには松江のさらびやかな才能が結晶していた。

緊密な構成と起伏に富んだストーリーの展開、読者の心をこころ憎いばかりに計算した起承転結の妙、クライマックスの盛り上げたの巧みさ、主人公やワキの人物配置と動かしがたの見事さ、小説というものはこういうふうに書くのだという見本を示したような作品だった。

小高は自分が逆立ちしても書けない作品だということがわかった。優れた作品は、「自分も負けないぞ」と発奮させる刺激効果があると同時に、あまり優れすぎていると、とうてい自分の及ぶところではないと絶望感を覚えさせることがある。

松江の作品は、まことにその後者の効果を小高にあたえた。

「これをどうするつもりなんだ？」

内面の愕おどろきと、自分がない才能をもつ者に対するクラクラするような嫉妬を隠して、小高は聞いた。

「べつにどうしようという気持はないよ。ただ自分が書いたものの中では、比較的よくできたような気がしたので、きみに見てもらったのさ、どうだろう？ きみの感想は。きみが割合いけるといってくれば、そのうち折りをみて百部ほど自費出版して同人や知人に配ろうかと思ってる」

松江はしごく恬淡てんだんと答えた。ちょうど時期を同じくして、ある大手出版社が主催するなま原稿の長編小説を対象とした新人文学賞の応募シメ切りが迫っていた。

商業誌が主催する新人賞などでは、宝クジ並みの確率に当たって首尾よく受賞したとしても、その雑誌からしかお座敷がかからない。職業作家として自立することはむずかしかったが、この長編小説賞は、当選者の実力と、当選後の政治力によっては充分プロとして文壇に迎えられるところから、職業作家を目指す腕に覚えのある文学青年が、こぞって応募するかなり権威のある賞であった。ことになま原稿を対象にしているので、選考も公正で、出版社の商業的政策の入りこむ余地が少

なかった。

小高は、この長編小説賞に松江の作品をぶっつけてみてはと思った。作品の批評をする前にそのことを松江にほのめかしてみると、

「と、とんでもない！ 僕なんかの作品が当選するはずはない。どうせ落ちるに決まっています、僕にしてみれば一生懸命に書いた作品だから、落ちればもうものを書くのがいやになるほどガックリする。万が一にも当選したら、僕にはとてもそんな晴れがましさには耐えられないね」

「それだったらどうだろう、僕の名前で発表させてくれないか？ それだったら当落いずれにしても、きみは僕のうしろに隠れていられるよ」

「きみの名前で?!」突然思いがけないことをいい出されて、松江は口をあぐりと開けた。

「選者がどうみるかわからないが、僕はこの作品を捨てがたいと思うね。自費出版で埋もれさせてしまうのは惜しいよ。当選はとにかくとして、予選通過はかたいと思うよ」

小高に説得されて、松江はしばらく考えこんでいたが、やがて定まった表情を上げて、

「きみがそれほどにいつてくれるんだったら、きみに任せよう。しかしくれぐれも僕の名前は出さなくてくれよな」

こうして松江の小説は、二人だけの納得ずくで小高の名前で応募された。そして予選を通過して、遂に当選してしまったのである。これは小高自身にとっても意外だった。松江の作品にホレたとはいえ、多分に自分の好みであり、無数の傑作、秀作に鍛えられている選考委員の鑑賞に耐えるかどうかの自信はなかったのである。

まして職業作家への登竜門として、賞金目当てや、ひやかし半分の素人の応募がほとんどない權威ある賞であるから、どんな桁はずれの傑作が、応募作品の中に混じっているかもしれない。

確率は量だけでなく、質的にも宝クジだった。

だから候補ぐらいにはいくかもしれないと思ったが、まさか当選するとは期待していなかった。小高は困惑した。だが、松江はもっと困惑していた。

「最初の約束だぞ、僕の名前は絶対に出してくれるな。ウチの銀行は行員のアルバイトを認めないのだ。おれは失職したくないし、小説書きになるつもりもないんだからな」

松江は、あくまでも小高の作品として押し通せと言った。そして小高はそのとおりにしたのである。自作として押しとおすことに何の異存もなかった。むしろ、当選者としての光栄こそ、一億人の中の十人の同人誌において夢にまで見た晴れがましい顕彰であった。他人の作品によってではあっても、だれも知る者はない。この身代り応募は、松江と小高の二人だけの秘密である。顕彰されるのは、小高の名前だけだ。これは彼にとって願ったり、かなったりだった。

小高が当面最も心配していたことは、当選後出版社の依頼に応えて発表する作品と、当選作との作風のちがいがから、身代り応募がバレないかという問題だった。

それさえバレなければ、自分には既成の名前の上にアグラをかいている作家に負けないだけの自信はある。松江俊吉の才能に対してはコンプレックスをもっているとはいえるものの、ひと度文壇に登録されれば、それを維持するだけの作品を書きつづける自信はあった。

まず当面の関門は「受賞第一作」である。受賞者は、まず主催出版社に長編小説を書き下す義務があった。受賞作には、たぶんにまぐれ当たりの要素がある。だからつづげざまに第一作を書かせてみて、果たして受賞者が職業作家としてやっていけるだけの力と資質があるか確かめるわけである。

したがって、この第一作には受賞作を上まわる作品が要求される。批評家や、各出版社の目も酷

しく注がれる。この一作に、それだけの期待に応える作品を書けないとなると、せっかくの当選も、賞をもらっただけで終^{ゴシヤ}ってしまふことが多い。

小高は、これに、かねてより暖めていた題材を書き下して、おっかなびっくりに差し出した。とても松江のものに及ぶ自信はなかったが、自分としては、まずまずの出来であった。

第一作まで松江に書かせるわけにはいかない。たとえ書かせられたとしてもこれを契機に自分の作品で勝負していこうと決めた小高が、どうしてもぐり抜けなければならぬ関門だった。これをくぐらなければ、自分の作品を発表できない、他人の腕と生産量に依存している「傀儡作家^{グイライタイ}」になってしまう。

そんなくらないならば、危険ではあってもオール・オア・ナッシングの賭けをやってみよう。——
——とかかなり悲愴な気持で発表した作品が、予想外の好評で迎えられた。

——文学というものの幅広さをまさに見せつけられる作品——

——大型新人、小高省吾の多面ぶりをいかんなく発揮した作品——

——小高が受賞作とはまったく異質の、沈潜、結晶した作品を、受賞後矢継早に発表した力量は、一つの驚異であり、確立させたレパートリーの上に安住している既成作家への警鐘である——
などと有力批評家が口をきわめてほめそやした。

小高省吾は作家の地位を確立した。原稿依頼が殺到した。次の関門は、自分本来の作品のほかに、受賞作の作風をもったものを書かなければならないことである。出版社の中にも、受賞作系列^{ライオン}のものを書いてくれと依頼するものが少なくなかった。これにまったく応えられないと、やはり疑問をもたれるおそれがある。

これを小高は、松江の作品をもらうことによって解決した。松江も自分の能力を認められたこと